

元 服

日本熱測定学会長 中西 正 城
お茶の水女子大学理学部



熱量測定と熱分析関係の学者のたぐいなき協力のもとに第1回熱測定討論会が開催されたのは1965年ですから、以来すでに13年余経っています。そのうち熱測定研究会が結成され、さらに学会になって現在に至り、現実的な意味での順調な発展を遂げてきたと申せましょう。生まれてから満

13年経ったといえば、昔の人ならそろそろ元服の年頃です。幼児期を脱して成人の仲間入りをする儀礼を受けなければなりません。本学会も元服の時を迎えて来し方を顧み、想いを新たにして将来の大成を計らなければならぬと思います。

物事の進展の跡をたどってみますと、その進歩に大きく分けて二通りの型があるようです。その一つは、あまり目立つ変化はないけれども常に前進して止まることがないというものです。もう一つはこれと反対に何かのきっかけに飛躍的に発展するがふたは静かに沈潜しているというものです。どちらの型であっても学問の進歩に貢献する点では同じですが、質的には大きな差異があると思います。前者を堅実型というなら後者は奔放型ということが出来ます。後者の適例としてここ数年の間に計測制御界に驚異的な変革をもたらしたマイクロコンピュータの出現があります。1971年に突如として現れた小さなマイクロプロセッサが巻き起した旋風はたちまち大きく成長して、やがては技術革命を指向するまでに至っております。

このようなマイクロプロセッサを組込んだ自動販売機で買物をするとき、そのケースの中に小さな頭脳が潜んでいるように感じます。これをわれわれの実験に取入れられないものだろうか考えたものですが、それから数年も経っていないいまではその気になれば自分の手でマイコンのシステムを好きなように構成して使いこなすことができるまでになっています。実際に、新しい実験機器にはそれ専用のマイコンを内蔵したものがかなりあるはずで、すでにお使いの方も少なくないと思います。極めて近い将来にわれわれの日常的な計測機器がマイコンの制御下に置かれるのは必至であり、それは歓迎すべき事態であると考えられます。そうなれば人は今よりも考える時間を多く持つことができるだろうし、苛酷な緊張

から解放されることにもなります。一人一人が自分のマイコンを持っていて、実験はマイコンと向合って対話しながら行なうというのちは夢ではないはずで。

熱・温度測定や熱分析はどちらかといえば地味な分野であります。そこでは地道な積み重ねに多くを期待する分野のようです。実際に熱測定討論会には手堅く着実に行った研究がたくさん報告されていて聴く者を利しています。討論会が終ったあとある種の満足感を持って帰りながら、わたくしはふと気が付いて、もっと破格のものがあってもよかったのではないかと、思うことがあります。個々の研究の価値を軽視するのでは決してありませんが、全体としてもっと多様性が現れる余地はなかったのかと感じるのです。この意味での奔放さは尊重したいと思います。

毎回の熱測定討論会や講習会には多方面からの参加者があって、熱に対する関心が意外に広いことがわかります。熱は普遍的性格をもつ量であるにもかかわらず、制御しにくいものないしは精密な測定が困難なものとして研究対象あるいは手段から敬遠される嫌いがあったと思いますが、最近ではむしろ熱を通じて新しい発展を期待する傾向が方々に現れてきています。これに応じて本学会では、たとえば、ライフサイエンスにおける熱測定が数年前から主要テーマの一つになって、すでに諸方の関心を集めています。また第14回討論会では高温関係の研究多数の参加を得てシンポジウムを開きたいへん有益であったと思います。このような事例に接するたびに、わたくしは本学会に包含される学問分野はもっと広がって当然だという感じを強くします。それにもかかわらず本学会の会員増加はここ暫く低迷状態にあるのは残念なことです。

熱に関する学問・技術はもっとも古いものの一つである反面まだ未開拓なところを残しています。このような熱を扱う学会として本学会は何をなすべきかは重大な課題であります。学問・技術の進展を凶ることは言うまでもありませんが、その成果を普及させる努力も必要でありましょう。また学校教育とは異なる形での後進の育成についても考えてみなくてはなりません。学会が一応の安定期に入ったいま、何をいかにすべきかと考えてみる時期に来たと思います。会員のみなさまの忌憚なき御意見を伺えれば幸いです。どんなことでも結構ですからお聞かせ願いたく思っています。